

その時、 現場は何を考え、 どう動いたのか

— 仙台市職員の震災の記憶・復興の記録 —



震災遺構整備 編



その時、 現場は何を考え、 どう動いたのか

— 仙台市職員の震災の記憶・復興の記録 —



震災遺構整備 編

本誌の内容は、2021年8月実施
の調査記録資料を再構成した
ものです。

ごあいさつ

横野 幸一郎（遺構整備当時 復興事業局震災復興室室長）

今、振り返れば「もっと良いやり方があったかも」とは思いますし、反省点も浮かんできますが、それでも現在、荒浜小学校が沢山の人の見て貰えていること。周辺の跡地活用も進んで、沿岸部全体として（フルーツ狩りとかBBQとかバスケットか温泉とか）色々な楽しみ方のできる場所になってきていること。最近では深沼海水浴場が再開したこと。これらをととても嬉しく思っています。

例えば若いファミリーが海辺で楽しく過ごした帰りに、ポツンと遺る小学校を見たこともから「あれは何？」と尋ねられて一緒に見学に行ったりする。そんな感じで、世代を超えて震災の事実が伝わったらしいな。

なんてことを、夏の深沼海水浴場の賑わいを眺めながら妄想したところなんです。

今野 俊徳（遺構整備当時 復興事業局震災復興室被災地支援担当課長）

震災当時は地下鉄南北線の復旧担当、余震が続くなか、夜、ラジオから「荒浜で200人の遺体が…」。暫く沿岸部には足が運ばず、復興事業局に異動。初めて訪れた荒浜は風が強く、周りは雑草だらけ、校舎には野鳥が自由に出入りし、沢山の拾得物を保管する教室もありました。

職場の仲間からは最初「家族を亡くした方もいるので…」という心構えを

続けた方もいます。震災の記憶と教訓を伝える活動には頭が下がります。

目次

1

横野室長インタビュー

震災遺構整備以前 3

1. あの日、家族と連絡が取れなかった経験から学んだこと
2. 仮設住宅の「お金の流れ」を追い、財源を確保した日々
3. 防災集団移転に挑むため、組織をつくり仲間を集めた
4. 復興事業局で学んだ“シンプルな組織”の力

2

横野室長×今野課長 対談

震災遺構荒浜小学校の整備 6

1. メモリアル理念
2. 荒浜小学校を仙台市の遺構として残すまで
3. 住民の声を聞きながら合意をつくる
4. 地域モニユメントのデザインも、住民の手で選ぶ
5. 荒浜小学校遺構を設計し、どこよりも早く形にする
6. 何を見せ、どう伝えるかを模索しながら

3

横野室長×今野課長 対談

荒浜の跡地活用計画 11

1. こまめな情報提供を怠らない
2. 時間の経過で、意見が前向きになってくる
3. 住民との対話を重ね、納得の形を探る
4. 遺族の声に向き合って

4

横野室長×今野課長 対談

遺構と教訓を未来へどう伝えるか 13

1. 建物が朽ちても、数百年先まで届けるために
2. 荒浜と中心部、二つの拠点で記憶をつなぐ
3. 議論の中で答えを見つけていく

震災遺構整備以前

1. あの日、家族と連絡が取れなかった経験から学んだこと

3月11日、私は市役所本庁舎7階の都市整備局で総務係長をやっていたので、地震発生時は本庁舎にいました。災害対策本部が立ち上がると、本部に詰めてしばらく業務にあたりました。大震災を経験された方はみんなそうだと思うんですけど、「こんなことって本当に起きるんだな」と、その時強く感じました。宮城県沖地震はいずれ来るとは思っていました。が、まさかここまでの規模になるとは想像していませんでした。

当時、妻は若林区役所に勤務していて、こどもは保育所に通っていましたが、どちらとも連絡が取れませんでした。迎えに行くこともできず、どうしようもないので仕事を続けていました。翌日の夜、偶然実家から電話がつながり、みんな無

事だと聞いたときは本当にほっとしましたね。そのとき、「ガラケーって強いな」と実感したのを覚えています。スマートフォンでは電池がもたない。災害時には1週間ぐらいバッテリーが持つ電話が必要だと痛感しました。

また、あの経験から、家族と「もしもの時どうするか」を話し合っておくことの大切さも強く感じました。連絡が取れないときの方法を決めておくのもいいし、連絡が取れない場合は諦めると割り切るのもいい。共働きならこどもを誰に託すのか、祖父母に頼むのかなど、事前に決めておくことが大切です。若い職員たちにも、そうした備えを日頃から話し合っておいてほしいと思っています。

2. 仮設住宅の「お金の流れ」を追い、財源を確保した日々

最初に「仮設住宅を建てるぞ」と号令がかかり、都市整備局が中心になってプレハブ仮設の建設を一気に進めました。とにかく「いいから造れ」という方針で、当時は宮城県が建設主体、仙台市は土地

の選定を担っていました。

ただ、実際に建ててみると課題が次々に出てきます。風除室が足りないとか、浴室の仕様が良くないとか。それなら「必要なことはすべてやろう」と現場は走り続けました。ところが、しばらくすると支払いが滞り始めて、実は裏づけとなる財源がないまま始まっていると分かったんですね。これはさすがにまずい、と私たちは資金の流れを徹底的に洗い出すことにしたんです。

そこで立ち上げたのが、いわば「お金の流れを追う会議」です。週1回ほど関係部署を集め、「金流れ」と名付けて、どの発注にどの財源が紐づくのかを1件ずつ整理していきました。財政部とも粘り強く調整を重ね、支払いができるように説得を続け、最終的には財源の確保にこぎつけました。

とはいえ、支払い事務は煩雑を極め、現場担当者は建設発注で手一杯です。そこで、各課のベテラン庶務職員4〜5人に協力をお願いして、支払い処理を一手に引き受けてもらいました。これが本当に頼もしかった。とにかく仕事が早いん

ですよ。「私がやります」と言っていて次々に処理を進めてくれて、あつという間に滞っていた支払いが回るようになりました。あの方々の対応力には今でも頭が下がります。

プレハブ仮設の建設費用は最終的に宮城県が救助費で支払う形となり、仙台市が先行して立て替えた分を後から精算する仕組みでした。風除室など追加工事の発注は市が直接行って、混乱の中でもどうにか資金の循環を整えていきました。

3. 防災集団移転に挑むため、組織をつくり仲間を集めた

地震が発生したのが3月。しばらくして5月の連休前には、「どうも防災集団移転を進めることになるらしい」という話が本格的に出始めました。当時の次長からは「これは相当な人手がかかる。専用の組織をつくらないと無理だ」と言われ、組織案をまとめるよう指示を受けました。とはいえ、その時点では「防災集団移転」という仕組み自体がほとんど分からず、誰に聞いても答えがない。困って相談し

たところ、区画整理課長を務めていた方が「たぶん集団移転は区画整理に似ている。俺が人員計画をつくってみる」と言ってくださって、その案を少し調整し、最初の組織案として提出しました。

検討の結果、まず防災集団移転を担う専門部署が必要だと判断されました。そこには土木職、建築職、そして用地担当の職員が一定数必要になります。さらに、宅地地すべりの復旧も並行して行う必要があるのもう一つ部門が必要だろうという話になり、結果的に「2部体制」が想定されました。

当初案では、都市整備局内に新たに二つの部を設ける構想もありましたが、それでは既存の総務ラインが詰まって業務が滞る可能性がありました。交通政策や都市計画、営繕など通常業務の意思決定ルートを維持したまま復興業務を加えるのは明らかに難しい。私自身、当時総務係長としてその流れを知っていたので、「これはさばけない。総務課を新たに設け、いっそ局を立てなければ機能しない」と提案しました。

反対意見もありました。復興専用の局

をつくると庁内で温度差が生まれるなどの懸念もありましたが、スピードを優先すべきだという考えが最終的に受け入れられ、私たちの案が採用されました。その際、私も当初は知らなかったのですが、生活再建支援業務も統合され、復興を一体的に進める新たな局（復興事業局）が誕生することになったんです。

防災集団移転を進める体制を整える中で、次に大きな課題となったのが「人」でした。計画を試算すると、どう考えても土木職が150人ほど必要になると。しかし仙台市には、そんな人員をすぐに確保できる余裕はありません。当時の次長から「他の政令市に応援を頼んだほうがいい」と言われ、7月の「大都市土木協議会」（全国の政令市土木局長が集まる会議）に出席しました。震災対応のさなか、欠席しても良かったのですが、あえて出席して、冒頭で5分間の発言時間をもらい、局長から各都市の局長へ直接応援派遣のお願いをしたんです。その後、正式に文書で派遣依頼を送付しました。

「防災集団移転とはこういう仕事です。各都市3人ずつ、できれば5年間派遣を

「お願いしたい」とお願いして、20都市が協力してくれば60人の応援が得られるんじゃないかという計算でした。現実はその甘くありませんでした。約半分の都市からは「一本釣りは困る。全国調整を通すべきだ」と断られました。それでも、残る半分の都市は関心を示して「支援したい」「自分のまちでも起きたときのために若手を経験させたい」と言ってくださる場所もありました。そうした都市と粘り強く交渉を重ね、10月には約10人、翌年（平成24年）4月には20、30人の応援職員が仙台に来てくれることになりました。

ちょうどその頃、国土交通省も全国的な土木・建築職応援の調整スキームを作る準備を進めていました。仙台市と政令市との個別調整はすでに始まっていたので、その流れに先行して乗る形になりました。とはいえ、国が主導して配分を行うと、被害の大きい、技術職員の少ない自治体に優先的に応援が回されることは明らかでした。

12月、国交省の説明会に呼ばれてその内容を聞いたときも、「これは仙台の応援

が取られてしまう」と感じました。そこで、「仙台でも既に何人か派遣を受けている」「ほかにも札幌や北九州の対口応援を受けている例もあると聞いている」と伝え、既存の約束を守ってもらうようお願いしました。国交省から「既に決まっているものは引き剥がさない」との回答を得て、仙台市は「先約あり」として応援枠を確保することができました。

結果的に、当初の約束は5年間でしたが、実際は2年間で応援職員が引き揚げとなりました。それでも皆さん本当に熱心で、前向きに業務に取り組んでくれました。その後は、仙台市から他都市へ職員を派遣する立場にもなり、支援の輪が次第に広がっていきました。

4. 復興事業局で学んだ “シンプルなお組織”の力

復興事業局が立ち上がった時、私は震災復興室の主幹として配属されました。いわば総務係長のような立場で、議会対応や調整業務など、番頭さんの役割を2年間務めました。メモリアルや遺構保

存といった個別の事業には直接関わっていませんでしたが、視察に訪れる他都市の方々への説明や、復興の進捗をまとめる「復興リポート」の作成を担当しました。局長の強い要望もあり、最初は拙いものでしたが、毎月改良を重ねながら発行を続けました。

進捗をどう見せるか、どの局面でどの数字を出すべきかを考えるのは面白かったですね。全体を俯瞰すると課題の所在も自然と見えてくる。データを整理しながら復興の全体像を見せる仕事にやりがいを感じていました。

復興事業局は震災専任の総括的な仕事をする局として設置されたのですが、この形にして良かったと思っています。宮城県が既存の部ごとに震災業務を割り当てたのに対し、仙台市は一つの専門局を作りました。確かに庁内に温度差が生まれる面もありましたが、意思決定の速さという大きな利点がありました。目的が明確な組織だからこそ、判断権限をどんどん下に下ろせる。部長レベルの判断を課長や係長に任せて、現場で決められるようになりました。正式な会議でなくて

も、廊下の立ち話や車中の会話で決まることも多く、「組織をシンプルにするほど仕事は速くなる」と実感しました。

意思決定のプロセスにとらわれず、現場で判断しても、それを報告して追認できるものなら良いという文化が、復興事業局には根づいていたと思います。加えて、主軸となる職員を極力異動させないようにしたことで、チームとしての一体感が生まれました。職場の雰囲気も良く、皆が目的を共有しながら前向きに働ける組織だったと思います。大変な業務でしたけど、だからやれたんでしょうね。今振り返っても、あのシンプルで機動的な組織づくりは、復興を支える大きな力だったと感じています。

2

横野室長×今野課長 対談

震災遺構 荒浜小学校の整備

1. メモリアル理念

横野室長 土木関係の仕事が進む中で、生活再建もまだ道半ばでしたが、「そろそろメモリアルのこと考えなければ」という話になりました。私の前任者が「メモリアル検討委員会」を立ち上げて議論を始めており、私はその後半のまとめを担当しました。委員の先生方からは厳しいご指摘も多く、メモリアル理念って何だろうとか、頭悩ませながらやっていった記憶がありますね。議論の中で印象的だったのは、「昔の人が何を残してきたか」という視点です。たとえば浪分神社（若林区）や蛸薬師（太白区・蛸薬師如来堂）など、津波をくぐり抜けて残ってきた場所があります。当時の人たちは、子孫に何かメッセージを残そうと思ったから、神社やお寺という共同体が続く場所

に記憶を託した。それが一番合理的で、だからこそ数百年後の私たちもそれを目にすることができるんです。つまり彼らの方法は正しかった。しかし、私たちはその記憶を十分に受け止められなかった。だから次の世代には、きちんと残す責任がある——そんな考えが「メモリアル理念」の根幹になりました。どう形にするかはいろいろありましたが、議論の中で一つの方向性として「遺構を残す」という方針が見えてきました。

2. 荒浜小学校を 仙台市の遺構として残すまで

横野室長 仙台市で遺構をどう残すかという議論の前に、実はひしゃげた道路標識などを集めていた美術家の方がいました。当時、市民局に相談があって「収集してもいいですよ」と文書を出したんですが、それはあくまで個人的な活動でした。市として何を遺構として残すか——その検討は、小学校を中心に始まったんです。
今野課長 県の有識者会議では、学校と住宅基礎を一体で残して見せることが重



津波被害を受ける荒浜小学校



津波被害を受ける南蒲生浄化センター

要だと書かれていましたね。

横野室長 ええ。学校と周辺の住宅基礎群を候補に挙げていました。南蒲生浄化センターの壁も候補には上がりましたが、場所が奥まっついていて人が自由に入れず、結局は現状のままにしました。あの歪んだ壁は津波の威力を示す貴重なものですが、あのままでは長く持たないだろうという懸念もありました。実は現在も残っているんですけどね。「では学校をどうするか」というのが次の議論でした。荒浜小学校を遺構として残すかどうか。ここが出发点です。

今野課長 検討委員会の報告書が出たのが平成26年の12月で、その翌年に地元へのアンケートが始まりましたね。

横野室長 そうです。私が室長になった平成26年度は、ちょうどメモリアル検討委員会の最終段階で、まだ荒浜小学校の話を表に出せる時期ではありませんでした。それでも「残すべきだ」という声は強く、議員さんからも「どうするのか早く決めろ」と迫られるほどでした。ただ、順序がありましたから、ちょっと待ってほしいと伝えていました。手法としてもっと地元の声を聞くようにとは言われて

いましたが、大きな反対意見はなく、保存の方向性についてはおおむね賛同を得られていたと思います。

沿岸部には中野小学校・東六郷小学校・荒浜小学校の三校があり、どこか一つを代表にするのは難しかった。中野小学校は堤防拡張で解体、東六郷小学校は敷地の活用方針が固まり、ようやく荒浜小学校を遺構として残す方向を示せるようになったんです。結果として、予算は約2億4000万円。ここに復興交付金の補助も受け、補正予算で整備を進めることになりました。

3. 住民の声を聞きながら 合意をつくる

横野室長 荒浜小学校をどうするかという議論の中で、まず行ったのが住民アンケートでした。地元の意見をしっかり聞こうと。

今野課長 あれが初めて地元の方々に「保存の是非」を問えた機会でしたね。それまでは生活再建が最優先で、とても聞ける状況ではなかった。復興公営住宅や

宅地造成が進み、ようやく4年目に入って皆さんの暮らしが落ち着き、考える時間や心の余裕が生まれたころでした。

横野室長 ただ、地元といっても皆さんはもう同じ場所に住んでいない。みなし仮設などバラバラの地域に暮らしていて、町内会のように意見を集約する仕組みが機能していなかったんです。だから「間接民主主義」は無理だと判断して、もう直接民主主義でいこうと。所有者の住所は分かっていたので、全員にダイレクトメールを送ってアンケートを実施しました。

今野課長 結果は、保存賛成が7割でしたね。

横野室長 はい。その結果を全員にフィードバックして、多くの人が賛成していることを伝えました。

今野課長 確か626世帯に配布しましたね。回答がなかった方にも結果を届けて、全体の温度感を共有できたのが大きかったと思います。

横野室長 「みんなが賛成しているなら」と自然に受け入れてもらえるようになり、保存への合意形成が少しずつ進んでいきました。1回目のアンケートでは単純に

「残すか否か」を聞きましたが、自由記述欄に多くの意見をいただいたことで、次のステップに進むことができました。そこで2回目は、私たちの側から「もし残すなら、こんなコンセプトでどうか」と具体的な提案を示したんです。

今野課長 そうですね。1回目（平成27年2～4月）は保存そのものの賛否を、2回目（平成27年10～11月）は「どのように見せるか」「どう活用するか」を伺いました。1回目の結果は7割が賛成で、特に「震災の記憶を伝えてほしい」「荒浜や学校の歴史を残してほしい」という意見をいただきました。反対は「思い出すのがつらい」「お金をかけるべきではない」といったご意見でした。

横野室長 ただ、賛成が多かったことで、次は具体的な活用案を提示できるようになった。2回目のアンケートでは、図面やイメージ図を添えて「こんな施設にしたい」と示したうえで、意見を伺いました。**今野課長** 結果的に、約9割の方が賛同してくれました。保存の方針も「ありのままに残す」という方向でまとまりましたね。手を加えず、朽ちていく姿も含め

て受け止める——つまり、ありのままの姿を見せることで震災の記憶と津波の脅威を伝えていこうという考え方です。アンケートでは、イメージ図に「柵を設ける」「エレベーターをつける」といった原案も載せて具体的に示しました。返ってきた意見の中には「気持ちを切り替えて新しい一步を踏み出したい」という前向きな声や、一方で「思い出が詰まった場所が傷ついたまま残るのはつらい」という率直な思いもありました。

4. 地域モニュメントのデザインも、住民の手で選ぶ

横野室長 アンケートで住民の声を直接聞くという方法は、やってみたら意外と効果的でした。コミュニティが再形成されていない中では、こうした直接の参加が一番確実だと思いました。実は地域モニュメントのデザインを決めるときも、同じような手法を取り入れました。

今野課長 そうでしたね。荒浜では、3案のデザイン案を住民の皆さんに送り、どれがいいかを直接聞きました。中野地

区など他の地域では、町内役員などの意見を聞きながら決めていきましたが、荒浜は全員参加の方式でした。

横野室長 地域から代表者を立てることができない状況だったので、住民全員に意見を返してもらうというやり方にしたんです。結果として、納得感の高いデザインを選ぶことができたと思います。こういう「選択型」の方法も、地元の声を反映させる一つの手法として有効だと実感しました。

5. 荒浜小学校遺構を設計し、どこよりも早く形にする

横野室長 荒浜小学校の遺構保存では、通常のように基本構想や基本計画を作らず、最初から設計に入るという進め方をしました。私のほうから「もう自分たちで図面を描いて、この形で発注させてください」と無理をお願いして、今野課長に早めの着手を頼んだんです。

今野課長 はい、いきなり設計段階から始まりました。ハード部分については基本的に「手を加えない」という方針で

したが、遺構の中に人を入れるというコンセプトから、津波を受けた校舎では耐震補強が必要となった展示室の壁の補強や、消防設備も整え、安全に公開できるように必要な範囲だけ手を加えました。

展示づくりについては、私たちが基本仕様を作って、内容と価格の両面で提案を受けるプロポーザル方式を採用しました。おかげで、わずか半年ほどで展示の形までこぎつけられたんです。請け負った業者さん大変だったと思いますが、みんなで試行錯誤しながら進めました。

横野室長 当時、震災遺構の整備例がほとんどなかったので、参考にできるものが少なかったんですよ。

今野課長 そうでした。雲仙普賢岳うんせんふげんだけの「大野木場小学校」を現地で視察し、柵やネットなど管理方法を学びました。私たちが考えていた構想と近い部分もあり、そこから多くのヒントを得ました。最終的には、展示専門のプロに演出面を補ってもらい、今の形に仕上がったんです。

横野室長 当時、私はちょっと無理をしてでも、どうしても早くオープンさせたかったんです。

今野課長 かなりハードなスケジュールでした。

横野室長 すみません、急ぎたかったんです。ちょうど県では南三陸町の防災庁舎を残すかどうかで住民の間で議論が紛糾していて、宮城県震災遺構有識者会議というものがあつたんです。仙台市もこの会議に参加していて「遺構は県内にもたくさんあって、このままでは荒浜小学校も埋もれてしまう」と感じていました。なので、スピードを最優先に進めました。結果として、荒浜小学校は県内で最も早く公開された震災遺構となり、東北でも注目される存在になりました。下世話な話ですけど、NHKの全国放送の中継も行われて、多くの人が訪れるきっかけになったと思います。

6. 何を見せ、どう伝えるかを模索しながら

今野課長 展示内容や仕様書の検討は、外部の委員会ではなく、内部でじっくり詰めていきました。担当メンバーや横野室長と話しながら、「こういうものを見せ

たい」「この形で伝えたらどうか」と議論を重ねて、それを翌年度の仕様に落とし込んでいったんです。

結果的には、かなり細かい内容まで書き込んでしまったかもしれませんが。「この部屋にこれを置く」という具体的な指示ではなく、「こういうものを見せたい」「この要素を伝えたい」というレベルでしたが請け負った業者さんには、むしろ細かすぎてやりづらかった部分もあったかもしれませんね。

横野室長 それは、多くの方を現地に案内して反応を見ていたからだと思います。「ここは反応が大きいな」とか、「この場所には印象に残る」といった感覚が蓄積されて、見せ方の方向性が自然と見えてきたんです。

今野課長 そうですね。テーマとして「津波の脅威」をどう伝えるかが大きな柱で、専門家の知恵を借りて、最も効果的に表現できる方法を探りました。私自身にとっても非常にクリエイティブな仕事でした。当時、市長から「津波の映像はリアルに作りなさい」と宿題をもらいましたが、荒浜周辺を映した津波映像はそれほ

ど多くなく、どう表現するか本当に悩みました。

他都市では、実写映像にCGで波を合成し避難を呼びかける映像を作った例もあったので参考に見ました。CGは精巧でしたが、やはり、3月11日の映像には緊迫感と現実の重みがあり「本物の記録が持つ力」は別格で、最終的には、当時のヘリコプター映像や現地のリアルな記録を採用しました。

横野室長 限られた時間の中での作業でしたが、私たちにとっても非常に創造的な仕事でしたね。

今野課長 震災遺構の整備にあたっては、



押し寄せる津波の様子



海岸公園冒険広場の被害



震災当日の荒浜小学校

旧町内会長さんや荒浜で活動を続けている方々など元住民の方から、いろいろな意見をいただきました。そのなかで「小学校を地域の集まる場所にできないか」という声や「震災前の荒浜の暮らしを映像で残してほしい」という要望もありました。特にNHKのBS番組「イナサ」で放送された震災前の荒浜の映像を校舎で見られるようにしてほしいという声的印象でした。

横野室長 そのご意見を受けて、NHKさんの協力で映像を提供してもらい、現在は4階の一室で常時見ることができるようになっています。

荒浜の跡地利活用計画

1. こまめな情報提供を怠らない

今野課長 当時は小学校の遺構整備と並行して、津波で被災した跡地利活用にも取り組んでいました。どちらかというと跡地の方に関わる時間が多く、そちらに重心を置いていたのが正直なところですよ。

ただ、市民の方や元住民の方と話す際には、必ず震災遺構の話も交えていました。やはり意見交換をするには、まず情報提供が欠かせません。知らないままでは意見も出せませんからね。跡地利活用では、たとえば県内外から「この土地をどう活用したいか」というアイデア募集を行った際にも、遺構についてもあわせて報告するなど、段階ごとに丁寧な情報提供を重ねました。

そして、元住民の方へは、移転先団地や復興公営住宅などでの説明会も複数回

開催、情報をできるだけ丁寧に届けるよう心がけました。そのため説明会を1日に3回行ったこともありました。また、遺構として一般公開する約1カ月前（平成29年3月11日）には、特別に元住民の方に校舎へ入ってもらったことも印象に残っています。

振り返ると、本当にさまざまな形で情報を発信してきました。そのおかげか、遺族の方を除けば、反対の声をいただいた記憶はほとんどありませんでした。

横野室長 年月が経って、少しずつ皆さんの気持ちが整理され、受け入れられるようになっていったのかもしれないね。

2. 時間の経過で、意見が前向きになってくる

今野課長 私が担当していた2年間は、震災から4〜5年目で、生活再建にも一定の目的がたち、少しずつ生活を立て直しながら、「これから」を考えたりする時間ができてきたころでした。地元との意見交換も、担当してきた方々の尽力によりベースが整えられたため落ち着いて話

ができるなど、現場に入りやすかったというのが正直な実感でした。

ただ一方で、最初に行ったアンケートでは保存賛成の声が多かったものの、市民全体がどう受け止めているのかには少し不安もありました。特に、跡地利活用を進めるにあたっては「あらたなにぎわいを生み出す」という言葉を口にするには、まだためらいのある空気が残っていたんです。

そんな中で参加したのが、まちづくり政策局主催の市民フォーラムです。跡地利活用をテーマに市民と意見を交わす場で、あえて私たちの考えを控えめに話してみたところ、市民の方々から前向きな意見が多く出ました。みんな同じ方向を見ていると感じ、「保存もできるし、跡地も前に進められる」と確信できた瞬間でした。

その後、現地再建を望む団体の方々と直接対話を重ね、自動車整備工場や、ご自宅をスケートボードパークとして整備した方など土地の関係者のもとにも足を運び、話をするようになりました。そうした流れの中で、翌年には震災遺構の工事が始まりました。やはり対話するタ

イメージは非常に重要だと痛感しましたね。あとは、とにかく相手の話をよく聞くこと。時には怖さもありましたが、そこを丁寧を重ねることが大事でした。

横野室長 確かに、地元の方々と落ち着いて話ができるようになったのは、今野課長の代からですね。それ以前は、担当者が現地へ行くたびに厳しい意見を受けて帰ってくるが多かった。住民の方は「現地に残りたい」、行政は「防災集団移転を進める」という立場で、明らかに方向が違っていたんです。そこに「跡地をこう活用したい」という提案を持って行ったことで、ようやく対話の方向が重なったように思います。

今野課長 そうですね。遺構を残すことと跡地を活用することは、両立してこそ意味があると思っていました。遺構は一度見れば満足する人も多いかもしれませんが、跡地を交流や活動の場として生かすことで、「あそこに小学校があったよね」と思い出し、また足を運ぶ。その積み重ねが継承につながると感じていました。当時は、現地再建を願う方々が月1回荒浜の海岸清掃をしていたので、私た

ちもその場に参加して毎回情報交換を行いました。行政の動きを伝えつつ、声を聞く時間を大切にしたんです。とはいえ、話し合いは月に1度程度でしたので、深く掘り下げた議論までなかなかできませんでした。それでも、反対意見はほとんどなく、前向きな要望が中心だったと思います。かなりエネルギーを使いましたが、皆さんが少しずつ前を向く姿を見ると、やってよかったと思えましたね。

3. 住民との対話を重ね、 納得の形を探る

今野課長 説明会などで震災遺構そのものについて厳しい意見をいただくことはほとんどありませんでした。どちらかというと、跡地の利活用に関する要望が多かったですね。たとえば、「跡地でまた人が集まれる場所をつくってほしい」とか、「以前喫茶店をしていたから、もう一度カフェを開いてみたい」といった声がありました。

そのほかにも、「避難の丘を整備してほしい」「貞山運河に橋をもう一本かけてほ

しい」といった意見もありましたね。

横野室長 跡地といっても、そこは災害危険区域であり、防災集団移転の促進区域でもあります。土地の多くは市が買い取っていますから、市として活用を決められる立場ではあるんですが、もともと住民の方々の思い出が詰まった場所です。だからこそ、「どんな使い方なら納得してもらえるか」を丁寧に聞く必要があります。住宅の基礎を一部残す案なども出ていましたし、跡地を新しい形で生かすにしても、住民の思いを無視することはできません。そこで、アンケートを通じて「このような使い方を考えていますが、どう思われますか」と意見を伺うようにしました。

4. 遺族の声に向き合って

横野室長 これは跡地の利活用でも同じことが言えますが、荒浜小学校の場合、避難して助かった方が多かったこともあり、全体として反対の声はほとんどありませんでした。周辺地域と比べても、比

較的スムーズに進んだと思います。ただ、その中でもやはり遺族の方への対応は一つひとつ慎重に行っていましたね。

今野課長 そうですね。保存を決める段階で、「もし残すのなら、亡くなった方がいた事実をしっかり伝えてほしい」と強く言われたことが印象に残っています。

例えば3・11メモリアル交流館は被害の実態を直接的に伝える施設ではないため、避難して「助かった命」が中心に語られますが、荒浜では約190名の方が亡くなられたという現実がある。その数字を展示に明記したのも、その声を受けてのことです。また、訪れた方が自分の思いを書き残せるよう「荒浜の声」というノートを設置しました。書くことで、心の整理や語りの継承につながるのではと考えたからです。

横野室長 遺族の方々は本当に、いろいろな思いを持ってらっしゃる。その思いを受けて、何かしなくちゃいけないなどそこは、整備に関わる私たちが最も大切にしなければならぬ部分でした。

今野課長 当時、現場の記録をまとめた本（注釈①）も読みました。被災した方々

が、遺体安置所と自宅、仮設住宅を何度も往復したという記述が胸に刺さりました。あの日の現実をどう伝えるかを考えることが、荒浜の遺構整備の原点だったように思います。

4

横野室長×今野課長 対談

遺構と教訓を 未来へどう伝えるか

1. 建物が朽ちても、 数百年先まで届けるために

横野室長 メモリアルの検討委員会では、「この教訓を数百年先までどう伝えるか」という議論をずっとしていました。難しいテーマですが、少なくとも百年、二百年というスパンで考えなければならぬと。その中で、遺構は伝えるためのひとつの手段なんですよね。建物自体はいつか朽ちます。荒浜小学校もすでに耐用年数を超えていて、いずれは中に入れなくなる時が来るかもしれません。でもそれ

も仕方がないことだと思っています。無理に延命しなくても、外から眺めるだけでも十分に意味がある。風雨にさらされて崩れていく姿もまた、歴史の一部として受け止めたいと。

今野課長 「小学校がここにあった」という事実こそが遺構そのものなんです。なぜそこに学校があったのか。かつてこの地に集落があり、人々の暮らしがあったからです。そしてそれが無くなってしまったのはどうしてなのかというところから、語り継ぐきっかけになればいいと思います。

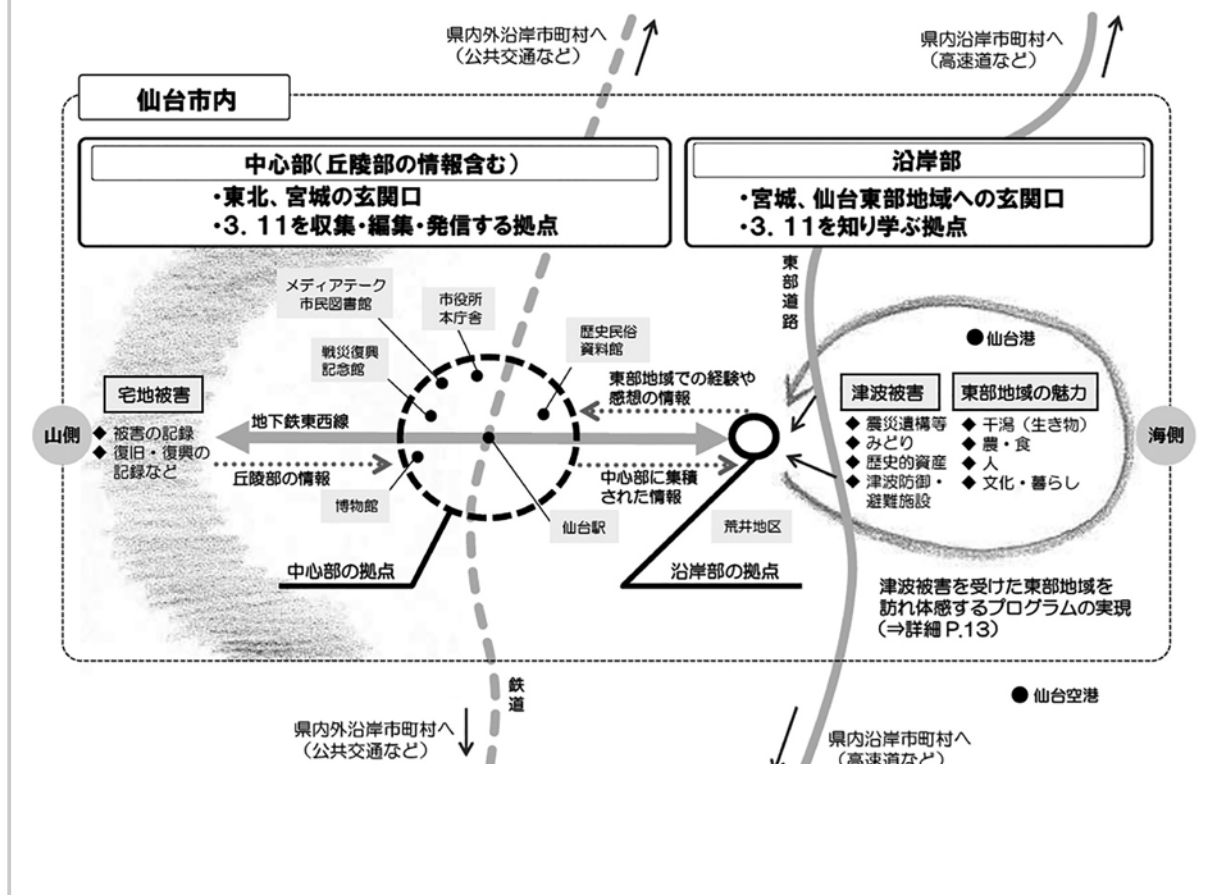
横野室長 庁内でその話をしたら驚かれましたけど、ずっと永遠に続くものだと考えている人もいたんでしょうね。でも建物は必ず老いていきますから。そこそが震災を伝えるリアルな証になると思っています。

2. 荒浜と中心部、 二つの拠点で記憶をつなぐ

横野室長 遺構について考えるとき、災害と戦争では事象が全く異なるけど、広島

（注釈①）『震災が教えてくれたこと 津波で家族3人を亡くした新聞記者の記録』 著者：今野公美子、発行者：朝日学生新聞社

拠点整備による事業展開



※出典「仙台市震災復興メモリアル等検討委員会報告書」11ページより抜粋

の原爆ドームのメッセージ性はとても強いですね。暮らしの中に「記憶」があるという点で、とても象徴的です。広島の人々が日常的に原爆のことを考えているわけではないと思うけれど、ふと街を歩けばあそこにある。その距離の近さが、伝承の強みなんだと思います。

一方で、震災後に新しくまちが作られた神戸にはそうした日常の中の遺構が少ないけれど、立派なアーカイブ施設(人と防災未来センター)がある。仙台は、シンボリックな遺構が残せることは強みだけれど、中心部から離れた荒浜にあるという地理的な弱点があります。あそこは今は普段の暮らしの場ではないですから。でも逆に、荒浜という現地に人を呼ぶ仕掛けを作ること大事だと考えました。

そこで私たちは二つの方向で考えを進めました。一つは沿岸部ににぎわいを生み出すこと。もう一つは、街の中心部に新たなメモリアル拠点を設けること。この二つのアプローチで、日常と記憶をどう結びつけるかを探りました。当時は両方やり切れるかはわからなかったけれど、

どちらかでも企画として残ればいい。そんな思いで進めていました。

今野課長 記憶を伝える仕組みを長く保つのは本当に難しいですね。人も組織も必ず変わる。思いをどう受け継ぐかは、どの世代にも課題として残ると思います。

横野室長 そうですね。これは仮にですが、行政が今は「伝えることが大事」と言っている、10年、20年後にはどういう方策がとられるかわかりません。だからこそ、人が代わっても自然と続いていく仕組みをどう作るかが、これからの大きなテーマだと思っています。



震災遺構仙台市立荒浜小学校（外観）

3. 議論の中で答えを見つけていく

横野室長 今回の対応で一番悩んだ判断はと聞かれると、あまり「ひとりで悩んだ」という記憶はないですね。もちろん迷うことはいくつもありましたが、いつも誰かに相談していました。みんなですうちに、自然と答えが見えてくることが多かったです。

今野課長 確かにそうでした。大変なことは多かったけれど、「困ったな」と思うくらいで悩み込むという感じではな



震災遺構仙台市立荒浜小学校（1階廊下）

ったです。常に話し合って、気づけば前に進んでいました。

横野室長 議論しているうちに不思議と方向が定まる。それが一番良かったと思います。上司も若い職員も含めて、チームで考える文化がありましたからね。

今野課長 復興室の雰囲気は本当に風通しがよくて、局長室もすぐ隣。何かあればすぐ相談に行けました。組織全体がひとりで抱え込まないようにする空気でした。

横野室長 他都市にも伝えたいのはそこです。復興のような大きな仕事こそ、上を巻き込みながらチームで動くこと。議論を重ねれば、完璧ではなくてもみんな

今野課長 横野室長から学んだのは、「分からないことは分からない」と率直に言える姿勢です。その姿勢があったからこそ、若い職員も意見を出しやすかった。結果的に、多様な視点で仕様や方針を決めることができたと思います。復興局は目的が明確でした。縦割りを超えて一つの目標に向かえた——それが仙台らしい強みだったと思います。

その時、現場は何を考え、どう動いたのか

— 仙台市職員の震災の記憶・復興の記録 —

震災遺構整備 編

編集	仙台市まちづくり政策局防災環境都市推進室
発行日	2026年3月
発行者・問い合わせ先	仙台市まちづくり政策局防災環境都市推進室 震災メモリアル事業グループ TEL 外線（直通）022-214-1117

本誌の内容は2021年8月に常葉大学、東北大学災害科学国際研究所、仙台市職員有志団体 Team Sendai と仙台市により実施された調査・編集資料を基に再構成したものです。

表紙、扉ページで使用する写真：仙台市提供

